

# The Snake by J. Steinbeck 試論

——〈見る〉から〈聞く〉へのひるがえり——

吉津成久

John Steinbeck の短篇集「長い谷間」(*The Long Valley*) に収められている一篇「蛇」(*The Snake*) は、自然のささやきと動物の生態と人間の本能が symbolical にからみあうという作者得意のテーマをもった佳品である。筆者は、この作品が、人間が己れの生に意味を与えてくれる他者の存在に気づき他者との愛の連関を求めて生きることを迫られる〈危機〉の瞬間を扱ったものであると考え、このようなテーマについて多大の示唆を与えてくれた波多野精一氏の「宗教哲学」や「時と永遠」、特に高木幹太氏の「神と人間」といった書を参考にしつつ作品論を展開しようと思う。

物語は、夕暮時のモンテレー (Monterey) の罐詰横丁 (the cannery street) を一人の若い男が生ケ簀からとりあげたばかりのヒトデを袋に詰め、それを肩にかついで歩いているところからはじまる。この男——フィリップス博士 (Dr. Phillips) の周辺には、いいようのない孤独の影がつきまといている。それは冒頭の場面における、この男の現象面をとらえたイメージ、たとえば人通りの途絶えた舗道に空にひびくゴム長靴底の「ビシャビシャ」という音 (squashed) や、彼が帰りつく海洋生物研究所の外圍描写——四方八方を大きな波形鉄板の鯛の罐詰で押しこまれていた (crowded in on it) ——に集約されている。か細い肉体をもったこの独身男 (a slight young man) が帰りつく home は、このように人ならぬ罐詰がなだれこんできそうな勢いで四方をとりかこんでいるのであり、crowd という語が、彼の孤独な現実を ironical に示している。ここを訪れる者はごく稀で、たとえあるとしても、彼ら訪問客は、博士にとって己れの知識の蘊蓄を傾ける相手としてのみ存在し、その関係は、彼と生物の関係同様、お互いに意味自覚性をもった主体者として自己の存在に深くかかわってくる人格的交りでは

ない。問題は、この主人公が自己の孤独性について何ら意識していないということである。それは彼の他者認識の態度の特異性に関係があり、描写が次第に建物の内部に移り、彼の日常生活の断面が浮彫されるにしたがって明らかになってゆく。

この男の帰りを待っているものは、捕えられている動物達で、鼠たちは金網を上を下へと大ざわぎでかけずりまわり、猫はミルクを求めてなきさけば、ガラス張りの檻の隅では体をからみあわせ、頭部だけ離れたガラガラ蛇の群が、博士を認めるとその舌を引込める。男はやがて自分の夕食の準備にとりかかる。ストーブの上に水のはいった湯わかしを置き、罐詰いの豆を全部それにくつつす。実験室のまわりには階段上の棚があって、そこには、この研究所で作製、販売している海洋生物の標本が壘にはいつ、ずらりとならべられている。彼はやがて隣の寝室にはいつてゆく。それは、びっしりと書物にとりかこまれた、独身の研究者にふさわしい個室で、軍隊用簡易ベッドが1つと、読書用の電灯と、座り心地のよくなさそうな木の椅子がわびしげに置いてあるだけである。彼はそこでゴム長靴をスリッパにはきかえ、再び実験室にもどると、強烈な白色電灯の光をあびている解剖台の上に2ダースのヒトデを袋から一度に取り出す。彼が今から行おうとしていることは、性的に成熟期に達したヒトデは干潮時に外気にさらされると精子と卵子を放出するという知識にもとずいて、彼によって人工的にそういう状態に置かれたヒトデから抽出された精子と卵子を特種な薬物とともに混ぜあわせて生殖作用を起させ、時間おきに（第1グループは10分後、第2グループは20分後といった風に）メントールで各グループの活動を停止させることである。つまり、生殖作用の過程を各段階毎に停止させ、それぞれを生物学研究のため顕微鏡の載物グラスにのせるのである。

この作品において、神秘的な女が登場する前のフィリップス博士個人の日常生活の断面をとらえた部分を便宜上第Ⅰ部とすると、この短い導入部において強調されているイメージは、2種類の〈眼〉である。これらの〈眼〉は、女の登場する第Ⅱ部ではさらに深い意味をもって提示されるわけであるが、これら2種類の〈眼〉が、この作品の主題であると筆者が考

える〈他者認識の態度〉をあらわしているとおもわれる。第1の〈眼〉は、フィリップス博士が飼っている〈蛇の眼〉で、「何も見ていないような、焦点の定まらぬ埃をかぶったような眼」(*the dusty eyes seemed to look at nothing*)で、これは第II部以降に登場する女の眼の伏線となっている。彼女は、蛇が餌として常食する鼠を呑込む場面を〈見る〉ことによって自分の性的欲求不満を解消しようとする。相手をすっかり呑込んで無にしてしまうその〈蛇の眼〉は、次第に〈女の眼〉となってゆく。しかし、この作品の第1部では、主役であるフィリップス博士の〈眼〉が強調されている。「顕微鏡をとおして対象を見てばかりいる人のもつあの温和な、憑かれたような眼」(*the mild, preoccupied eyes of one who looks through a microscope a great deal*)は、この短い導入部で2度くりかえされている。そして、この〈眼〉とともに並列して強調されているのは、解剖台を照らす白色電灯である。この光は、「白色灯」(*the white light*)、「ぎらぎら輝く光」(*the glaring light*)、「注ぎこむ白色光」(*the pouring white light*)、「強烈な光」(*the strong light*)等々、さまざまな形容で、最後まで消えることのない光として表現されている。自然の生命の流れをせきとめ、白色光のもとで自己の知性によって生命の神秘を解明することに取憑かれたこの〈男の眼〉は、大自然の時の流れを告げる波音の変化や、囚われの身の動物たちの声を〈聞く〉耳はもたない。彼にとって他者は見えていてもその声は聞こえてこない。あくまでも内と外という一線が画され、彼にとって他者とは自己の存在とはかかわりのない、そこにただ投げ出されたものであり、他者の生、性、死、あるいは時間といった神秘的な存在(たとえば、ヒトデの実験に象徴されるように)は、自己の存在とかかわらぬ数学の定理のような普遍的真理と同様、知性によって解明できるものでしかありえない。しかし、彼が人間である以上、この他者認識の態度、すべての認識を知性に頼る態度は、いつかは根底からくつがえされる運命にある。一方、あの、何も見ていないようですべてを呑みつくす〈女の眼〉は、自己の情緒的欲望によって他者を無にしてしまう眼である。人間は、動物とは異り、自己の存在意味を問う者であり、自己の生に意味を与えてくれる者は他者である

---

ことを認識せざるをえない存在である。したがって他者認識態度が人が人として存在するか否かを決定する。この作品にあらわれる二つの〈眼〉は、この他者認識態度のうち、〈見る〉態度の典型であり、それは〈聞く〉態度と対照をなすものである。

〈見る〉態度とは、いいかえれば、自己中心的な〈思いこみ〉の態度ともいえる<sup>(1)</sup>。自分を超えている、自分の手のとどかない他者の存在を真実に認めようとする態度である。神秘的な存在に他ならない他者の語りかけに応じない〈見る〉態度から結果してくるのは、第1に、音声の聞こえないテレビの画像を見ている場合のように、類推するだけで十分にその画像が理解できないのと同様、他者を表面的にしか理解できない。〈見る〉のみで〈聞く〉ことのない時、われわれは何よりも他者を知らぬ独断の人間になってしまう。第2に、他者の経験を知らぬ自分一個の小さな経験の中に閉じこもってしまうため内容の貧弱な人間になる。第3に、他者との結合によってはじめてつくられる生甲斐とか生の意味が失われて孤独な人間になってしまう。このような〈見る〉態度が破れて〈聞く〉態度にひるがえる時、彼方から人間のうちにひきおこされる決断、これが、この作品の主人公フィリップスに課せられた命題である。

この作品のはじめから終りまで、定期的にかつ確実に聞こえてくる物音が1つある。それはフィリップス博士の研究所が海上に張り出している部分を支える棧橋の杭に砕け散る波の音である。それは干潮に移るにしたがい刻々と異った音色を奏するのであるが、男の耳には、ある時点に至るまで耳にはいらぬ。この音は、男によって囚われの身となっている生物たちが本来在るべき大自然の声であるが、彼にはすべてが〈見る〉ためであるのであって、〈聞く〉態度は存在しない。この波音が2つの〈眼〉の描写の相間をぬってきこえてくることは重大な意味をもっている。この波音は第1部では、2回提示される。

The little waves washed quietly about the piles under the building.<sup>(2)</sup>

さざ波が建物の下の杭のまわりに静かに打ちよせていた。

The waves washed with little sighs against the piles under the floor.<sup>(3)</sup>

波がかすかなため息をのこしながら床下の杭に打ちよせていた。

第1部で、フィリップスの認識態度をもっとも象徴しているのは次の場面であろう。

His preoccupied eyes turned to the busy rats in the wire cages. Taking grain from a paper sack, he poured it into the feeding troughs. Instantly the rats scrambled down from the wire and fell upon the food. A bottle of milk stood on a glass shelf between a small mounted octopus and a jellyfish. Dr. Phillips lifted down the milk and walked to the cat cage, but before he filled the containers he reached in the cage and gently picked out a big rangy alley tabby. He stroked her for a moment and then dropped her in a small black painted box, closed the lid and bolted it and then turned on a petcock which admitted gas into the killing chamber. While the short soft struggle went on in the black box he filled the saucers with milk. One of the cats arched against his hand and he smiled and petted her neck.<sup>(4)</sup>

彼の取憑かれたような眼は、金網を張った檻の中でせわしげに動きまわっている鼠たちに向けられた。紙袋から穀粒を取り出すと、それを彼は餌箱に注いだ。その途端、鼠たちは先を争って金網をかけおり餌の上に落ちた。ガラス棚の上の剝製にされた章魚とクラゲの標本びんの間にミルクびんが1つ置いてあった。フィリップス博士はそのミルクを棚からおろすとそれをもって猫の檻に向って歩いた。しかし容器にミルクを満たさないうちに檻に手をつっこんで1匹の大きな雌の野良猫をそっとつまみあげた。彼はちょっとの間、猫をなでていたが、小さい黒塗りの箱の中にその猫をおとすと、蓋を閉め、錠をかけ屠殺室にガスを送りこむ豆コックをまわした。黒い箱の中で短くかすかにもがく音がつづいている間、彼は受け皿にミルクを満たした。1匹の猫が彼の手抵抗するように背中を丸めたが、彼は微笑を浮べ、その頸筋をなでてやった。

物語後半におけるフィリップス博士の〈見る〉から〈聞く〉へのひるがえりを考えるだけでも、この部分は最大のアイロニーであり、対象を〈もの〉としか見ない博士自身が、逆に人格をもたない〈もの〉として、喜劇的存在にうつっている。知識のための殺戮、一個の生命の死は、自己の存在とかわりのないものとして忘却されている。この態度は、対象が動物であるから可能であるという論理は成り立つとしても、すっかり身にしみついてしまっているために、たとえ人間にあてはめた場合でも、その基本的認識態度はかわらないであろうと推測できる。

フランスの哲学者ガブリエル・マルセルは、〈問題〉の領域の認識と〈神秘〉の領域の認識を挙げ、自己の存在と関係のない自己から離れて存在する事柄に関しては知性の働きを信ずることができるが、自己の存在と結びついている事柄に関しては知性の働きに限界があると述べている。〈問題〉という意味の英語 *problem* は、ギリシャ語の *problēma* から来たもので、「前へ」という意味のプロ = *before* と「投げる」という意味のパロー = *throw* という2つの言葉が合体したもので、「前に投げ出されるもの」 = *something thrown forward for discussion* という意味だそうである<sup>6)</sup>。この〈問題〉の領域において事柄を認識する場合には、数学の定理のような普遍妥当の真理が成立し、すべての人間の認識は一致する。その場合、知性は信頼に値するものである。それこそ〈前へ投げ出されたもの〉であるから、自己の存在とかわりなく扱える対象である。しかし〈神秘〉となると知性の働きに限界がある。その領域でも最も代表的な〈死〉は、単なる〈問題〉として冷静に認識することを拒むものであり、それと事実に取り組むことによってはじめて体験される非合理的なものであり、内と外とはっきり区別できない、喜怒哀楽を持って生きている私という存在の中に侵蝕してきてこの世を生きる態度を決断させるものである。それは、私の主体を覚醒させる力を持っている。

生物学者として研究にうちこみ、動物ばかりを相手にしてきたフィリップス博士は、その〈眼〉が象徴するように、最も重要な自己の人間性をどこかに置き忘れていた。環境調和的にしか生きられない動物の知らない学問

とか道徳は、環境超越的に生きれる人間に許された〈自由〉から生まれたものであるが、同時にその〈自由〉は、人間に対して己れの生にはじまり死に至る生涯を展望させ、己れの生の意味をみずからに問わせる原動力である。そして、自己を超えた他者との連関を持つ時、己れの存在に意味があることを人間は自覚する。愛する者の死は人を絶望におとし入れるが、仮に自分の方が死んでいたら残された愛する者はやはり絶望に苦悩していたらと思うと、愛する者の苦しみをかわりに自分が背負うことによって、2人の間に依然として愛の連関が存在しているという自覚が与えられ、生の意味を再びとりもどすことができる。これが〈私は人間である〉ことを証明する。

フィリップス博士が本来の人間性をとりもどすきっかけとなるのは第Ⅱ部の〈女〉の登場である。音もなくはいってきたこの女は、背の高い、痩せた体格で、渋い黒服に身を包み、まっすぐにのびた黒髪は扁平な額をおおうほどその生際が低く、その黒い眼は実験室の強烈な光にあたってきらきらと光る。この女の外觀が黒一色でおおわれていることは、白色灯のもとであらゆるものを白日のもとにさらけ出すフィリップス博士の環境と見事な対照をなしており、この場違いな感じの突然の訪問者によって何か異常な事態が起るであろうということは誰にでも想像できる。なかでも、強烈な印象を与えるのはやはり女の〈眼〉である。最後までくりかえされる彼女の〈眼〉の描写を一通り順を追ってここに引用してみる。

Her black eyes glittered in the strong light.<sup>(6)</sup>

彼女の黒い眼が強烈な光の中でキラキラと光った。

Her black eyes were on him, but they did not seem to see him.  
He realized why - the irises were as dark as the pupils, there was no color line between the two.<sup>(7)</sup>

彼女の黒い眼は彼に向けられていたが、彼を見ているようではなかった。彼はその理由を悟った——虹彩が瞳孔と同じくらい黒く、2つの間に色分けの境界線がなかった。

---

Her eyes were bright but the rest of her was almost in a state of suspended animation.<sup>(8)</sup>

女の眼だけはいきいきしていたが、肉体のその他の部分はほとんど活動を停止した状態であった。

Her dark eyes seemed veiled with dust.<sup>(9)</sup>

彼女の黒い眼は埃をかぶっているようにおもえた。

Her head raised and her dark dusty eyes moved about the room and then came back to him.<sup>(10)</sup>

女の頭がもちあがり、その黒い埃をかぶったような眼が部屋をぐるりと見まわし、やがて彼の方へもどった。

She continued to look at him but her eyes did not center on him, rather they covered him and seemed to see in a big circle all around him.<sup>(11)</sup>

女はずっと彼を見ていたが、焦点は彼に定まっておらず、むしろ、彼の体全体を包んで、そのまわりに大きな円環をえがいて眺めているようであった。

The woman stared down at the blunt dry head. The forked tongue slipped out and hung quivering for a long moment... Her eyes did not move from the flat head.<sup>(12)</sup>

女は、蛇の丸くつるんとした、かわいた頭部を凝視していた。フォークのようにわかれた舌がペロリと出て、しばらくふるえていた……女の眼はその平べったい頭から離れなかった。

He found that he was avoiding the dark eyes that didn't seem to look at anything.<sup>(13)</sup>

彼は、何も見ているようには思えないその黒い眼をいつのまにか避けていた。

...her black eyes were on the stony head of the snake again.<sup>(14)</sup>

女の黒い眼は、石のようにつるんとした蛇の頭に再びそそがれていた。

She turned her misty eyes to him, "Will he eat it now?" she

asked... She looked back at the snake. "I want to see him eat it."<sup>(15)</sup>

女は、その霧のかかったような眼を彼に向けて、『彼（＝雄蛇）がそれ（＝鼠）を今から食べるんでしょうか』とたずねた……彼女は蛇に視線をもどした。『彼が食べるのを見たいわ』

Her eyes came out of their dusty dream for a moment.<sup>(16)</sup>

彼女の眼が、そのぼんやりした夢心地の状況からいっしゅん覚めたようだった。

この〈女の眼〉は、1つのことにとり憑かれた〈男の眼〉とともに、あの他者認識の〈見る〉態度の双壁を成すものであるが、その裏にかくされた真意は、はじめのうち明らかにされておらず、もちろんフィリップス自身もわかっていない。彼は、研究所をおとずれる他の人種と同類と勘違いして、ヒトデの実験経過をお定まりの早口文句で説明する。この段階では、その女は彼にとって今までの他者と同様に自分の存在とはかかわりのない内と外の区別された存在にすぎない。しかし、女が実験にまったく関心をもたないため、彼女の関心をこちらに惹きつける欲望にかられる。

A desire to arouse her grew in him...The desire to shock her out of her inattention possessed him again.<sup>(17)</sup>

彼女の眠っている関心を呼びさまそうという欲望が彼のなかで大きくなった。……女にショックをあたえて、その無気力な状態からひきあげようという欲望が彼の心をふたたびとらえた。

ここに2度くりかえされている〈欲望〉(desire)は、恐らくフィリップスにとって最初の経験ではあるまいか。他者を自己に惹きつけようとする〈欲望〉は、他者を認識する最初の段階ではある。彼は、ガス室からぐにゃぐにゃになっている猫をとり出すと、解剖台の上にあおむけにし、外科用メスで喉を一滴の血も出さない見事な手さばきで切開し、動脈と静脈に防腐剤を流しこんで、生物学教室における血液循環作用をしらべる教材を完成する。しかし、女はいっこうに興味を示さない。博士の実験が一段落

ついたところで、女は自分の用向を博士に伝える。この研究所に飼ってある雄のガラガラ蛇を自分の所有物にしたい (I want him to be mine), それを家に持ち帰らないで時々ここに来て自分のものになった蛇が鼠を食べるのを見たいというのである。結局、博士はその雄蛇を5ドルで売ってしまう。女は、鼠を吞込む蛇の姿に、満たされない人間同士の愛の連関の代用を求めている。その蛇は必ず雄でなければならない。それは、自己の性の欲求を満たしてくれる男の代用であり、彼女自身でもある。女の孤独がうんだ両性具有の願望が、そのような異常な状況をつくり出すのであろう。このあたりから、〈女の眼〉が〈蛇の眼〉そのものとなり、女の体が鼠を吞込む蛇の蠕動と同じ動作をおこし、蛇と同じように音もなく体が移動してゆく。〈女の眼〉が一つの対象に焦点があっているのではなく、対象を含めた大きな円環にあるということは、蛇によって代表されるように、〈他者〉を吞込み、結局無にしてしまう〈眼〉であることが次第にフィリップス博士にも知覚されてゆく。

〈女の眼〉と〈波の音〉は、最後まで対照的に並列されてゆくが、第Ⅱ部冒頭における、女が登場してまもない時点での波の描写は次の通りである。

The waves under the building beat with little shocks on the piles.<sup>(18)</sup>

床下で波が杭にぶつかって小さな衝撃音をのこした。

この段階では、波の音は、鼠のなき声と同様、博士には意識されていない。波音の変化は、確実に、永遠に反復される時の経過を告げているのだが。しかし、女が蛇の話をもち出した直後はどうか。

The woman was standing beside him. He had not heard her get up from the chair. He had heard only the splash of water among the piles and the scampering of the rats on the wire screen.<sup>(19)</sup>

女が彼のそばに立っていた。彼には女が椅子を立つ音が聞こえなかった。杭の間で水しぶきがあがる音と、金網の上を鼠が走りまわる音だけが聞こえていた。

ここに至って、男の耳に、今まで意識にのぼらなかつた大自然と動物の存在が知覚される。それは、人間が環境超越的に生きるときにゆるされる〈自由〉というものがよびおこす自己の生の意味への問いかけ、他者の存在への意識のはじまりをあらわしており、一方、それはとりもなおさずフイリップス博士にこれまでの自己の他者認識態度と自己の孤独の本質を覚醒させるきっかけでもある。彼の心にさきほどの〈欲望〉(desire) について、〈憎しみ〉(hatred) がめばえてくる。これまでの生涯で彼の心にこのような人間的感情のめばえたことがあつただろうか。

“I see. You want to watch how rattlesnake eat. All right. I'll show you. The rat will cost twenty-five cents. It's better than a bullfight if you look at it one way, and it's simply a snake eating dinner if you look at it another.” His tone had become acid. He hated people who made sport of natural processes. He was not a sportsman but a biologist. He could kill a thousand animals for knowledge, but not an insect for pleasure. He'd been over this in his mind before.<sup>(20)</sup>

『分かりました。ガラガラ蛇が餌を食べる様子を見たいんですね。いいでしょう。ご覧にいれましょう。鼠は25セントです。見方によっては闘牛を見るよりも観物だし、別の見方をすれば、蛇がものを食べているというだけのことです』彼の口調が辛辣になってきていた。彼は自然の作用を自分の慰物にする人間どもを憎んだ。彼は狩猟家ではなく生物学者であつた。知識のためなら千の動物でも殺すことができるが、気晴らしのためなら虫一匹殺せなかつた。こういう議論はもうとくに彼は卒業していた。

この箇所は、彼がこれまでの自己の生き方、他者認識の態度の本質をあらためて考えなおす段階にはいったことをあらわしており、「こういう議論はもうとくに卒業していた」ということは、裏がえせば、「そのはずだ

ったのに、実は卒業していなかった」ということを暗示している。上記引用文全体が、彼の認識態度の罪深さ、自己の良心に喰いいてくる罪の糾弾に対する苦しい弁明にきこえるのも不思議ではない。彼の心に今まで意識したこともない罪 (sin) という一文字が浮んでくる。そして、彼は必死に自分が女と同じ罪の共謀者であるという良心の咎から逃れようともがいている。

Dr. Phillips was shaken. He found that he was avoiding the dark eyes that didn't seem to look at anything. He felt that it was profoundly wrong to put a rat into the cage, deeply sinful; and he didn't know why. Often he had put rats in the cage when someone or other had wanted to see it, but this desire tonight sickened him. He tried to explain out of it.

"It's a good thing to see," he said. "It shows you how a snake can work. It makes you have a respect for a rattlesnake. Then, too, lots of people have dreams about the terror of snakes making the kill. I think because it is a subjective rat. The person is the rat. Once you see it the whole matter is objective. The rat is only a rat and the terror is removed."<sup>(21)</sup>

フィリップス博士は震えおののいた。彼は何ものにも焦点があっていないようにおもえる女の黒い眼をいつのまにか避けていた。彼には、鼠をその檻に入れることが、極悪非道な、大変罪深い行為のようにおもわれた。そして、何故そう思われるのか分らなかった。彼は、これまで、それを見たいと希望する人があれば、何の感慨もなく、鼠を檻の中に入れたものだった。しかし今夜のこの欲望だけは、彼の気分を悪くした。彼は、自分の立場を説明して、このいやな気分から抜け出そうとした。

『それは観物ですよ』と彼はいった。『蛇がいかに見事にしとめるか、ご覧になれましょう。それを見たら、蛇に対して尊敬の念をもたれるかもしれませんよ。またその反面、それを見た後、殺戮を行う蛇の恐しさについて夢を見る人も多勢います。私が思いますに、その場合、食われる鼠は、その人にとって主観的な鼠だからです。その人が鼠になっているからです。この道理さえわきまえておけば、すべては客観視できます。鼠はあくまでも鼠で、恐怖心は消えてしまいます。』

フィリップスが、自己のこれまでの認識の態度が間違っていなかったこと、それに正当性をあたえようとつとめて平靜に弁明しようとしているようであるが、もはや彼の言葉は空虚にひびくだけで、現在の苦悩に満ちた本心が次第に明らかにされてゆく。

Reluctantly he went to the rat cage. For some other reason he was sorry for the rat, and such a feeling had never come to him before. His eyes went over the mass of swarming white bodies climbing up the screen toward him. "Which one?" he thought. "Which one shall it be?" suddenly he turned angrily to the woman. "Wouldn't you rather I put in a cat? Then you'd see a real fight. The cat might even win, but if it did it might kill the snake. I'll sell you a cat if you like."

She didn't look at him. "Put in a rat," she said. "I want him to eat."

He opened the rat cage and thrust his hand in. His fingers found a tail and he lifted a plump, red-eyed rat out of the cage. It struggled up to try to bite his fingers and, failing, hung spread out and motionless from its tail. He walked across the room, opened the feeding cage and dropped the rat in on the floor. "Now, watch it," he cried.<sup>(22)</sup>

いやいやながら彼は鼠の檻に向った。どういうわけか、彼は鼠にすまない気持になった。このような気持におそわれたことはこれまでに1度たりともなかった。彼は、自分に向って金網をからみあいながらかけあがってくる白い肉体のかたまりを見渡した。『どれにしようか?』と彼は考えた。『餌食になる運命をどの鼠に負わせようか?』突然、彼は怒ったように女の方を向いた。『むしろ猫を入れたらどうですか。そうすれば、本当の闘争が見られますよ。猫が勝つことだってあるかもしれませんが。でもそうなりゃ、その蛇は猫に殺されるかもしれませんね。お望みなら、猫を売ってもかまいませんよ。』女は彼を見ていなかった。『鼠を入れなさい。』と彼女はいった。『私はその雄蛇が食べるのを見たいのです。』

彼は鼠の檻をあけて、手をつこんだ。指が尻尾にさわって、一匹の丸々と太った赤い目をした鼠を檻からつまみあげた。鼠は尻尾をつかんでいる彼の指にかみつこうと、もがきながら体を引き起こそうとしたが、むなしくもどのようにさかさまに四肢を広げ、尻尾の先から硬直したように動

---

かなくなった。彼は部屋を横切って行って、蛇の餌用になっている檻の蓋をあけ、その鼠を床におとした。『さあ、見なさい。』と彼は叫んだ。

Which one……? という言葉があらわすように、一個のかけがえのない命とその死が、自己の存在の外側にある〈問題〉の領域で認識されるものではなく、それを思えばぞっとする、自己の存在を内側から侵蝕してくるものであることがこの男の魂をゆすぶりはじめている。また、上記引用文の後半部は、Which one……? の問いかけと同様に、生命のいとおしさが（たとえば plump, red-eyed といった形容詞があらわすように）、この男の感覚をとおしてつたわってきているようである。

砂地の床におり立った鼠は、無邪気にそのピンク色の毛のない尻尾を嗅ぎ、やがて無関心によちよちと歩きはじめる。しんと静まりかえった緊張した雰囲気の中で、博士の耳をとらえるものがある。

Dr. Phillips did not know whether the water sighed among the piles or whether the woman sighed. Out of the corner of his eyes he saw her body crouch and stiffen.<sup>(23)</sup>

フィリップス博士は、海水が杭の間に碎けて、ため息のような音をたてているのか、女がため息をついているのか分らなかつた。女の体が縮こまり、硬ばる様子を彼は横目で見た。

フィリップス博士には、波の音によって代表される大自然のささやきかけ、そこに生を全うせんとうごめく神秘的な他者の存在がもはや無視できない勢いで彼の存在意識の中に食い込みはじめている。〈見る〉態度から〈聞く〉態度へのひるがえりはまさにはじまっている。環境調和的にしか生きられない動物の、自然の摂理に沿った生と死は、環境超越的に生き〈自由〉をゆるされた人間の〈見る〉態度によって歪められ、それが隣人たる対人間にも向けられ、みずからを孤独におとしめている自己の実態を今はじめてこの男は悟りはじめている。そのような気持をフィリップスは次のように表現している。

“It’s the most beautiful thing in the world,” the young man said. His veins were throbbing. “It’s the most terrible thing in the world.”<sup>(24)</sup>

『それはこの世で一番美しいことです。』とその若い男はいった。彼の血管がどきどき脈打っていた。『それは、世の中でもっとも恐ろしいことです。』

やがて蛇が次第に行動に移る。蛇が体をくねらせて進むにつれて女の体も心なしかゆれてゆく。蛇の毒きばが鼠の扁胛骨の間を見事にとらえて、鼠が次第に呑込まれはじめる時、女の口元に不気味な笑みが浮ぶ。

It nudged the body gently with its blunt nose, and drew away. Satisfied that it was dead, the snake touched the body all over with its chin, from head to tail.

It seemed to measure the body and to kiss it. Finally it opened its mouth and unhinged its jaws at the corners.<sup>(25)</sup>

蛇は、鼠の死体をそのずんぐりした鼻先でこつこつ突ついて体を離れた。鼠がすでに死んでいることを確めると、鼠の体全体を頭から尻尾までその顎でもってさわった。それはまるで体長を測っているようでもあり、また接吻をしているようでもあった。とうとう蛇は、顎の両隅までぱくりと開けた。

フィリップス博士は、頭が女の方へ向おうとするのを意志の力でやっとなげく。女が今もし口を開けていれば恐しさと気分のわるさで参ってしまうだろうと想像する。上記引用文から、女の〈見る〉態度の真意が自己の性的欲求不満からくるものであることは明らかである。

やっとなげかえったフィリップスは、ヒトゲの実験のために割あてていた時間がすっかり無駄になったことを知り、もはや彼の目的にかなわなくなったヒトゲを全部床下の海水中に捨ててしまう。

The waves had fallen so that only a wet whisper came up through the floor. The young man lifted a trap door at his feet

---

and dropped the starfish down into the black water. He paused at the cat, crucified in the cradle and grinning comically into the light. Its body was puffed with embalming fluid...The rat was swallowed, all except an inch of pink tail that stuck out of the snake's mouth like a sardonic tongue.<sup>(26)</sup>

波が急にドサッと落ちた。その後、じめついた、ざわざわした音が床下から伝わってきた。その若い男は、はねあげ戸をあげ、真っ暗な海にヒトデをうちすてた。彼の足が猫のところに来てとまった。それは台の中で、はりつけにされ、電灯にむかって、おかしそうにニタニタしていた……鼠はピンク色の尻尾を1インチばかりのこして、あとはすっかり吞込まれていた。蛇の口から出ているそのピンク色の尻尾の先は、まるでせせら笑っている舌のようであった。

ここには、まず、本来〈神秘〉の領域でとらえられるはずの生、性、死、時間といったものと、フィリップス博士の知的認識がとらえた〈問題〉の領域におけるそれらとが対比され、彼の知性の限界がここに総括的に、ironical にあばかれている。人工的に干潮時に置かれたヒトデが精子と卵子を放出するという彼の知性がとらえた時間、生、性、死の観念が、何ものにも冒されない常に変らぬ時を告げる大自然のささやきかけ、最高の干潮時をしらせる波の音と見事な対照を示している。己れの〈欲望〉や〈学問〉のための〈道具〉として犠牲にしたはずの動物から、人間の方が〈道具〉として、〈もの〉として存在しているにすぎなかったということをおもいらされるといふ paradox がここに強調されていると思う。女の出現が、逆に彼のこれまでの存在の基盤を大地震のようにゆるがすことになり、このような人間におとずれる〈危機〉において、上記引用中にみられる crucified という言葉が象徴するように、はじめて彼の魂に〈罪〉ということが意識され、〈意味自覚的存在〉としての人間にたちかえったといえる。彼は、自己の存在の意味は、他者との愛の連関なくしてありえないという人間本来の姿にかえったのである。女が立ち去った後、彼はこれまで機械人間のように立ち働いて腰をおろすこともなかったあの坐り心地のよくない椅子を陶醉したようにねむっている蛇の前に据えてそれに腰をおろすと、

混乱した頭の中を整理するように一人告白 (confession) をはじめる。

“I’ve read so much about psychological sex symbols,” he thought. “It doesn’t seem to explain. Maybe I’m too much alone. Maybe I should kill the snake. If I knew - no, I can’t pray to anything.”<sup>(27)</sup>

『俺は心理学上のセックスの象徴についてずいぶん読んだことがある』と彼はおもった。『どうも、それでは説明がつきそうにもない。恐らく俺は孤独でありすぎるんだ。あの蛇を俺は殺すべきなんだろう。もし俺が……知っていれば、いや、俺は何ものに対しても祈れないのだ。』

フィリップス博士は、女が帰ってくることを期待し、彼女が帰ってくれば、自分はここを出ようとも考え、何ヶ月も女の姿をさがし求めるが、ついに彼女には会えない。彼が If I knew …… と云ってついに口に出せなかった言葉は何か？ 恐らく……部には、〈神〉あるいは〈信仰〉といったような言葉がはいるのであろうが、これまでの存在認識がとりかえしのつかない程深く身にしみついてしまってどうしても表現できないのか、それとも、そのような言葉を口に出せない程、自己の状況に深く絶望し、それを表現するにはあまりにも罪深い自分を恐れているのかもしれない。

波多野精一博士の「宗教哲学」の中の言葉『他者が主体の生の内容である』という中の〈他者〉について博士は次のように説明しておられる<sup>(28)</sup>。

1. 客体と客体とを比較する場合の〈性質の他者性〉
2. 客体が主体に対して有する〈客体の他者性〉
3. 実在者が実在者に対する〈実在性としての他者性〉

第1の〈性質の他者性〉とは、鉛筆と消しゴムという〈もの〉同士の関係で、この場合、両方がお互いに他者である。第2の〈客体の他者性〉は、人間とピアノの関係のようにピアノを弾けない人間にとってピアノは全くどうしようもない絶対に自由にならない恐るべき他者であるが、練習次第では、いつかは自分の自由になれる存在であって、主体によって処理され

---

享楽され、結局無に帰する。

フィリップス博士の認識態度、その the preoccupied eyes が〈見る〉態度によってとらえられた他者性とは第1の〈性質の他者性〉にあてはまるであろう。彼と他者との関係は、すべて内と外とはっきり区別された、ただそこに投げ出された〈もの〉同士の関係にすぎなかったからである。

一方、あの女の認識態度、その the dusty eyes が〈見る〉態度によってとらえられた他者性とは、第2の〈客体の他者性〉にあてはまるとおもう。彼女の〈眼〉の表現としてたびたび示されることば——何も見ていないようにすべてを呑みこむ〈眼〉——つまり、その蛇の眼は、他者を処理し、享楽し、結局無に帰してしまう〈眼〉である。

第3の〈実在性としての他者性〉における他者とは、自己に生の意味を供給してくれるような他者という認識から、それ自身において中心を持ち、絶対に自己の思うままに処理できぬ存在として、尊敬の念をもって認識されるべき存在である。しかしこのような〈実在的他者〉を他者としての神聖さを失った自己の観察や欲望の対象に、即ち客体、〈もの〉としてしまっているのが人間の実情である。

そういう意味で、この作品における重要なモチーフとしてたびたび言及してきた〈眼〉と共に、〈餌〉というものが重要性を帯びてくる。新約聖書ヨハネによる福音書第1章、47節にあらわれる〈ドロス〉という言葉は、高木氏の解説によると、〈偽り〉という意味のギリシャ語で、その語源は、〈餌〉という意味をもっていたということである<sup>(29)</sup>。〈餌〉というのは、ある目的を釣りあげる手段であるが、実際は人間界たとえば男女の関係に見られるように、相手をさも目的として愛しているように見せながらお互いに自己の幸福を釣りあげる〈餌〉として相手をみなしているという、虚偽の愛の中に陥入っている。したがって、人間と人間とが交際しているように見えながら、実は人間と〈もの〉とが交渉しているに過ぎないという、喜劇的かつ悲劇的事態が人間の生の営みということになる。そこにはたとえ多くの他者に取り囲まれていても、実は〈もの〉としか交らないための、一人ぼっちな孤独感、したがって生きる意味の喪失感が人間に残されると

いう結果が生じる。第一ヨハネ3章14節の〈愛さないものは死のうちにとどまっている〉という言葉が真実の響きをもって人間に迫ってくる。

フィリップス博士の〈見る〉態度が、女のもつもう一つの〈見る〉態度に接して、ゆくりなくも自己の人間性にめざめるのであるが、彼の接する対象が普通〈もの〉として取扱われる生物であったとしても、波音が象徴する大自然のささやきかけとともに、それが博士の耳に実在性を主張する存在として認識されるかぎり、彼の人間回復を促す貴重な存在となりうるのである。そのことは波多野博士の次の言葉に表明されている。

普通「もの」として取扱われ呼ばれるもの、例えば一枝の花、一しづくの水も、それ自らの実在性を主張するものとしてわれに迫り来り又われに何事かを訴え何事かを語る。かかる限りそれは実は物的ではなく「人」的な存在を保つのである。而して反対に、人間と呼ばれる所のものも、或る目的の手段として、例えば一定の任務を果すべき組織の一員として、或は享楽の為めの具としてなど観られ取扱われる限りに於ては、または単なる表象内容として体験される限りに於ては、「もの」として存在するに過ぎぬ。<sup>(30)</sup>

フィリップス博士は、まさに不徹底な愛の關係に生きるわれわれ人間の象徴であり、彼におとずれた人間の〈危機〉の瞬間こそ、人に〈見る〉から〈聞く〉へのひるがえりをおこさせ、実在的他者が己れに生を与えてくれる貴重なものとして自覚させられる瞬間である。また、そのような瞬間こそ、徹底した愛の關係をまっとうしたイエス・キリストに人向わせ、イエスの苦悩と自己の苦悩が呼応する瞬間でもある。

フィリップス博士の最後の告白が、信仰に向う一步手前の状況で終わっていることはかえってリアルな人間性をわれわれに訴えており、彼がこの後、どのような人生模様を描いてゆくか、一つの可能性を秘めているといえよう。

最後に、この作品の主題に貴重な意味を与えてくれるとおもわれる聖句を挙げて本稿をしめくくりたいと思う。

---

信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来たのである。(ローマ人への手紙10章7節)

もしあなたが盲人であったなら罪はなかったであろう。しかし、今あなたがたが〈見える〉と言い張るところに、あなたがたの罪がある。(ヨハネによる福音書9章41節)

〈見ないで〉信ずる者は、さいわいである。(ヨハネによる福音書20章29節)

#### 註

1. 高木幹太著『神と人間』、日本YMCA同盟出版部、昭和37年発行。pp.28~31.
2. John Steinbeck: "The Snake" in *The Long Valley*, 尾上政次註釈、南雲堂、1970年発行。p.66.
3. Ibid., p. 67.
4. Ibid., pp. 66~67.
5. 『神と人間』、pp. 35~41.
6. *The Snake*, pp. 67-68.
7. Ibid., p. 69.
8. Ibid., p. 69.
9. Ibid., p. 70.
10. Ibid., p. 70.
11. Ibid., p. 71.
12. Ibid., p. 72.
13. Ibid., p. 74.
14. Ibid., p. 75.
15. Ibid., p. 77.
16. Ibid., p. 79.
17. Ibid., p. 69.
18. Ibid., p. 70.
19. Ibid., p. 71.
20. Ibid., p. 73

21. Ibid., p. 74.
22. Ibid., p. 75.
23. Ibid., p. 76.
24. Ibid., p. 76.
25. Ibid., pp. 77—78.
26. Ibid., p. 78.
27. Ibid., p. 79.
28. 波多野精一著『宗教哲学』, 第4章「愛」の神, 岩波全書48, 昭和15年発行,  
pp.153~316. とくに p.250. および, 前掲『神と人間』, pp.58~59.
29. 『神と人間』 p.60.
30. 『宗教哲学』 pp.164~165.